

共同研究プロジェクト「言語接触と系統継承：大湖地域から南部アフリカにかけて話されるバンツー諸語と隣接言語の記述研究」

日時：2010年3月20日（土）午後1時から

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所セミナー室（301室）

研究発表：

1. 河内一博（AA研共同研究員，防衛大学校）
「Kupsapiny 語 Sidaama(Sidamo)語に関する理論的問題」
2. 若狭基道（AA研共同研究員，明星大学）
「ウォライタ言語学のためのカンバタ言語学」
3. 梶茂樹（AA研共同研究員，京都大学）
「ウガンダ・ホイマ市の言語使用状況」
4. 稗田乃（AA研所員）
「Topic and informational structures in Kumam」

全体報告：

3年間最後の共同研究会を開催した。フィールドワークで得られた資料にもとづき、現在までの研究状況と将来の研究への展望を話し合った。

メンバーの多くがそれぞれのフィールドワークのプロジェクトをもっている。それらをどのように組織化し、さらに、発展していくかを議論した。

（各報告要旨は次ページよりご覧ください）

題目： Sidaama (Sidamo) 語と Kupsapiny 語に関する理論的問題

本発表では、Sidaama 語（エチオピアの Sidaama Zone、Highland East Cushitic）に関する問題と Kupsapiny 語（ウガンダの Sebei: Kapchorwa district と Bukwa district、Southern Nilotic の Kalenjin branch）に関する問題のうち、主に著作物の執筆において現在直面している問題を扱った。（以下で、Sidaama-I: 文法に関する問題 [A]-[E]、Sidaama-II: その他の問題 [F]、Kupsapiny-I: 文法に関する問題 [G]-[I]、Kupsapiny-II: その他の問題 [J]という構成になっている。）

Sidaama -I（主にdissertationの改訂と文法のスケッチ）

[A] 序論：社会言語学的背景

・方言の違い（主に、母音の長さ、implosive の使用の有無、特定の語彙と構文の使用の有無における違い）

[B] 品詞

・ Verb of saying と verb of doing（それぞれ、*y-a* と *ass-a*）が、open-class である形式（品詞は不明；ときに onomatopoeic）の後に続いて、形成される複合動詞（*y-a* の場合自動詞、*ass-a* の場合通常他動詞）がある。他のエチオピアの言語と違って、この open-class の形式はこれ以外には使われない bound の形式である。移動（特に一定の場所での運動）、姿勢の変化、感情、音声に関連する状態変化を表すことが多いが、特に意味領域は限定されていないようである。ほぼ同じ意味を表す一般の動詞があることがあり、複合動詞と一般の動詞のどちらがどのようなコンテキストで使われる傾向があるのかを調べている。

[C] 形態

・ 格の標示：東アフリカの多くの言語と同じように、Sidaama 語は有標主格言語 (Dixon 1994) とみなされている (Tucker 1966, Hudson 1976, König 2006, 2008) が、本当にそうなのか？

・ 定性を表すのに名詞と動詞にストレスを置く。

[D] 統語

・ Complementation のパターン：複数のパターンを取る動詞が多い。意味の違い、使われるコンテキストのタイプの違いを調べる必要がある。

・ 関係節の形成のパターン：この言語は gapping または pronominal retention を使って関係節を形成する（pronominal の関係節が pronominal retention を使うのはまれ: Keenan 1985）が、どちらの場合も、どのようなタイプの統語的役割の名詞句でも関係節の先行詞にすることができるようである。

・ 語順：SOV 以外の語順は、elicitation によるデータやストーリーのデータには余り頻繁に起こらないが、会話では起こりやすいようなので、起こるコンテキストを調べる必要がある。

[E] テキスト（2010年2~3月に集めたストーリーのデータを現在分析中）

・ 句・節の連結を含む文がよく使われる。（句・節の接続をする接尾辞・クリティックの使用、複雑な関係節の使用、複雑な疑問の節の使用）

・ 前提となっている多くのことが表現されていない。（表現すると冗長と判断される）

一度出てきた人間を表す名詞句を使わないことが多い。（特に主語が、代名詞ではなく、動詞の接尾辞の人称・数・性のみで示されている場合が多い。主語が名詞句で表されずに動詞の接尾辞で示されているだけなので、指示対象が曖昧であると思われることがあるが、それでもインフォーマントは名詞句で表すのはふさわしくないと言う。）

・ 目立たせたいものを表す名詞句を先に置くことにより使われる、変則的と思われる語順

・ 抽象的な意味しか伝えないが、使った方が良いとみなされる動詞の使用

・ 動詞の接尾辞 *-na* が conversation softener としてよく使われる。

Sidaama -II (その他の問題)

[F] 「なる」型の言語 (?)

・ Ikegami (1991) が「なる」型の言語 (日本語) に見られると述べている特徴が Sidaama 語に多く見られる。これはテキストにおいても見られる。

(i) 主語をはっきりと表さない。

(ii) 具体的な物体としてではなく、出来事として事態をとらえる方法

(iii) 状態を表すのに状態変化動詞の完了形を使う。

Kupsapiny-I (文法のスケッチ)

[G] 序論：社会言語学的背景

- ・ Kupsapiny 語が vitality を失ってきた歴史的背景
- ・ 現在のセバイ地方の言語の使用状況に関するより客観的なデータ

[H] 音韻

- ・ ATR の区別 (?)

[I] 形態

- ・ 接辞
- ・ 有標主格言語か？ 少なくとも固有名詞で主格も対格も形態的に有標である例がある。

Kupsapiny-II (その他の問題)

[J] 二つのタイプの場所 (location) と関連する概念 (goal, source, instrumental) の表し方

Kupsapiny 語のデータをもとに以下の二つの問題を取り上げた。(i) 二つのタイプの location (object location と event location) の区別は、日本語と韓国語に特有のものか (Choi 1993, 1997) ? (ii) Conceptual map において source は goal よりもどのタイプの location からも遠いか？

Creissels (2006) と Nikitina (2009) によると、location, goal, source のうち、location と goal を同じ形式で表し、source を違った形式で表すという言語はよくあっても、goal だけを違った形式で表す言語や location だけを違った形式で表す言語は極めてまれであるということを報告している。Nikitina (2009) は、goal は source よりも概念として location に近いという仮説を立てている。しかし、location は一つの概念として扱われていて、日本語や韓国語でなされている二つのタイプの location (object location と event location) の区別は考慮に入れられていない。

Kupsapiny 語では、二つのタイプの location (object location と event location) のうち、object location は goal に、event location は source に近いようである。まず、名詞句でまたは前置詞を使って goal, location, source を表す場合、goal と object location を特に形態的標示のない名詞句で表すのに対し、source と event location には前置詞 *am/om* を使う。また、動詞の接尾辞を使って goal, event location, source を表すことができるが、goal を接尾辞で表すのは限られた場合のみであり、object location は動詞の接尾辞によって表されないのに対し、event location を表すことのできる接尾辞 *-ci, -yi, -to, -ne, -e, -te* のうち、最後の3つは source を表すのにも使われる。

(発表要旨)

ウォライタ言語学のためのカンバタ言語学

若狭基道

ウォライタ語は、エチオピアの南西部、首都アジスアベバから約 400 キロメートル離れた場所で話されているオモ系の言語である。一方カンバタ語は同じくエチオピアの南西部、ウォライタ語地域の北部に隣接した地域で話されているクシ系の言語である。

カンバタ語に関しては発表者は短期間しか調査を行っていないが、両言語に類似した単語が幾つも見付かっている。その理由としては、恐らく全くの偶然によるものは少なく、両言語が系統的に近い（共にアフロアジア大語族に属するとされており、オモとクシを分離させない立場もある。とは言え、どちらかを習得すればもう一方も話せる、といったレベルではない）ためか、接触による借用関係（歴史的にも両言語の話者は絶えず接触して来たと考えられる）に由来するものと考えられる。本発表では名詞に焦点を当て、これら類似した単語を観察する。

ウォライタ語もカンバタ語も大抵の語は「語彙的な語幹＋文法的な語尾」という構造を有している。文法的な語尾により、ウォライタ語の普通名詞は 4 つのクラス（男性名詞 3、女性名詞 1）に分類され、カンバタ語の普通名詞は男性名詞が 7 つの、女性名詞が 8 つのクラスに分類されると考えられる。各普通名詞がどのクラスに属するのかを意味的に予測することはほぼ不可能である。

ここで問題となるのが、両言語間で同根関係にある場合、或いは借用関係にある場合、これらクラス間の対応はどのようなものなのか、ということである。その対応関係は複雑である。以下のようなものが見付かっている（順にウォライタ語のクラス、カンバタ語のクラス。引用形として機能する絶対格の語尾を挙げる）。男性-aa：男性-a。男性-aa：女性-ata。男性-aa：女性-aata。男性-aa：男性-u。男性-iyaa：男性-a。男性-iyaa：女性-ita。男性-iyaa：女性-uta。男性-uwaa：男性-a。男性-uwaa：女性-uta。

この対応から何が読み取れるのか、未だ見当が付いていない。今後の課題である。他の周辺言語や有力言語のデータが必要となるかも知れない。

ウォライタ語は語彙が豊富であり、かなり個別化・特殊化した意味を表す語が多く、文学（口承文芸）で活用されている。恐らく古い時代の借用語を数多く含んでいるのではないかと推測されるが、カンバタ語（及び他の周辺言語）の研究は、ウォライタ語彙の成り立ち、構成、歴史を探る手掛かりとなろう。

また、適度な距離にあるこの 2 つの言語を研究することで、アフロアジア比較言語学も進歩を遂げられると思われる。それは比較言語学一般に対するアフリカ言語学の独自の貢献を示すことにもなる。

Topic and information structures in Kumam

Osamu Hieda

- I) クマム語においてトピックは、節の先頭の位置に置かれる。
- II) トピックは、Coordinate construction や Subordinate construction において後続する節の主語になる。
- III) Coordinate construction や Subordinate construction において、後続する節のトピックの位置にある独立代名詞は、先行する節の主語と同一指示である。

1) dákó ɔ=ted-o cá m ne ɪcúɔ ε=kó myɛl
woman₁ 3SG₁=PERF:cook-TR food for man₂ 3SG_{1/2}=and then did dance:INF
'The woman₁ cooked food for the man₂ and then s/he_{1/2} danced.'

2) ɪcúɔ dákó ɔ=ted-o né cá m ε=kó myɛl
man₂ woman₁ 3SG₁=PERF:cook-TR for:3SG₂ food 3SG₂=and then did dance:INF
'The man₂, the woman₁ cooked for him₂ food and then he₂ danced.'

1) の前置詞句から ɪcúɔ 'man' をトピック化した文が 2) である。1) では Coordinate construction における後続する節の主語は、先行する節の主語の位置にある名詞である可能性も、前置詞内の名詞である可能性も等しく。

しかし、前置詞句内の名詞がトピック化された 2) では、Coordinate construction における後続する節の主語は、先行する節のトピックの位置にある名詞である。それ以外の可能性はない。(II)

3) dákó ɔ=ted-o cá m ne ɪcúɔ εn é=!kó myɛl
woman₁ 3SG₁=PERF:cook-TR food for man₂ 3SG₁ 3SG₁=and then did dance:INF
'The woman₁ cooked food for the man₂ and then she₁ danced.'

独立代名詞 εn '3SG' が Coordinate construction における後続する節のトピックの位置に置かれると、それは、先行する節の主語と同一指示である。(III) 3) においては、後続する節の主語は、先行する節の主語である。それ以外の可能性はない。

4) okélo dákó ɔ=wandɪk-ɔ bá!lwá bút-é εn é=!kó soom-é
Okelo₂ woman₁ 3SG₁=PERF:write-TR letter to-3SG₂ 3SG_{1/2} 3SG_{1/2}=and then did read:INF-3SG
'Okelo₂, the woman₁ wrote a letter to him₂ and then s/he_{1/2} read it.' (she > he)

4) において後続する節のトピックの位置におかれた独立代名詞 εn '3SG' は、先行する節の主語 dákó 'woman' と一致することを求められ(II)、一方、先行する節のトピック okelo

は、後続する節の主語と一致することが求められる (III)。Coordinate construction における後続する節のトピックの位置にある独立代名詞は、後続する節の主語と同一指示である。

II と III を同時に満たすことは不可能である。II と III がことなる結果をもたらすとき、後続する節の独立代名詞と同一指示する名詞と主語に 2 つ以上の解釈が生じる。

II を優先すると、後続する節の主語は、先行する節のトピック *okelo* と同一指示となり、同時に、後続する節の独立代名詞は、*okelo* を指示する。

III を優先すると、後続する節の独立代名詞は、先行する節の主語 *dákó* ‘woman’ と同一指示である。同時に、後続する節の主語は、*dákó* ‘woman’ になる。話し手によれば、III を優先する解釈がより自然である。